

## 二つのヨーロッパ陶器

(財)京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館



写真1・図1 出土したオランダ産アルバレロ形の壺(右図の文様は推定して復元した)

**ヨーロッパ陶器を発見** 御所南小学校(中京区柳馬場通竹屋町下る五丁目・1993年調査)建設にともなう発掘調査で出土した遺物を調べていたところ、見慣れない陶器を1点見つけました(写真1)。表面は熱を受けて焼けはがれ、文様は不鮮明でしたが、軟質の胎土や寸厨の器形から、海外からもたらされた陶器とみられるものでした。

次いで、1996年にJR二条駅構内(中京区西ノ京梅尾町)の発掘調査で出土した遺物からも、見慣れない文様をもつ陶器碗を1点見つけました(写真3)。白く軟らかい胎土やプリントされた文様から、ヨーロッパ陶器かと思われましたが、幕末の地層からの出土で

あるため明治以降の国産品の可能性もあり、ヨーロッパの陶磁器に詳しい神戸市立博物館の岡泰正氏に見ていただきました。その結果、さきほどの壺も含めてどちらもヨーロッパ陶器であることが判明しました。この二つのヨーロッパ陶器は、江戸時代における京都の海外交流を知る貴重な遺物であるため、ここに紹介します。

**アルバレロ形の壺** 写真1の壺は、天明八年(1788)の大火災の後片づけをするために掘られた大きな土塚から、他の焼けただれた陶磁器と共に出土したものです。十数個の破片を復元すると、口縁部と底部がくびれた特徴的な形をした壺になりました。この形はヨーロッパでは「アルバレロ」と

写真2 徳川秀忠墓出土の壺 高さ13cm  
『阿闍陀』根津美術館編 1987年より転載

図2 ヨーロッパ陶器の出土地



写真3 出土したベルギー産ティードリンカータイプの碗（左は外面、右は内面で実物大）

呼ばれ、日本国内でも茶陶の「阿蘭陀水指」として数多く伝世しています。また、発掘による出土品としては、徳川二代将軍秀忠墓をはじめ、十例ほどが報告されています（写真2）。この壺の多くはオランダ・デルフト窯のもので、寛永十六年（1639）の鎖国以来、唯一ヨーロッパの窓口であったオランダの東インド会社によってもたらされたものと思われ、煙草葉文や幾何文などが華やかな色彩でいきいきと描かれています。

今回発見出土した壺は、残念なことに火災により表面が焼けはがれて文様は見ると影もありませんが、うっすらと残った釉薬から、上下に横線をめぐらせ、中央に菱形と縦の太い線を配した幾何文であったことがわかります。さらによく観察すると、いままで知られている他の壺と同じ製作技法で作られているながら、幾何文が簡素化していることや、底部の仕上げに違いがみられます。この違いが、壺の作られた年代の差なのか産地の違いなのか、今のところは不明ですが、いずれにしてもオランダかその周辺のものであることは確かかなようです。おそらくは17世紀



写真4 同じティードリンカータイプの文様をもつ皿と碗（写真提供 神戸市立博物館）  
碗の外面には出土品と同じような喫茶する人物像が描かれている

の後半に京都に請来され、貴重品として伝世したのち火災に遭ってやむなく廃棄されたのでしょう。

#### ティードリンカータイプの碗

写真3の碗は、内・外面に花柄を配し、外面にはお茶を飲む婦人像がプリント技法で描かれた碗の口縁部です。この陶器碗は、ベルギーのファブリック・セラミス社の「ティードリンカー」という文様意匠をもつもので、復元すると口径8.1cm、高さ5cm程度の小碗で、日本では主に煎茶碗として使用されたといわれています。また、同じ文様をもつ伝世品から、若い男女が樹の下でテーブルをはさんでお茶を楽しんでおり、そのまわりを花が取り囲むという全体の文様構成も知ることができました（写真4）。このタイプの碗は、江

戸末期に大量に輸入されており、都市部の富裕層を中心に広く行きわたっていたと思われ、沖縄から北海道まで全国で出土することでわかります。日本文化をヨーロッパに紹介したことで有名な、オランダ人医師シーボルトも、文政九年（1826）長崎から江戸に参府した帰り、大坂の住友家において、ヨーロッパの食器を使ったもてなしを受けており、『江戸参府紀行』（東洋文庫87巻）に記載されています。

京都市内から出土する近世遺物は多種多様で、その量も膨大です。その中でも、ヨーロッパ陶器は極めてまれな遺物ですが、この二つの陶器から当時の京都のイメージが広がっていくように思います。

（能芝 勲）